

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

7 年目という節目を迎えた今年の 3.11 は、犠牲者追悼と復興祈願の祈りが全国でささげられました。仙台教区では、カテドラルである元寺小路教会や岩手県宮古教会など、各地で、「3.11 東日本大震災犠牲者追悼・復興祈願ミサ」がささげられました。福島県の浜通りでは、さまざまな追悼行事が、宗教の枠を超えて行われました。カリタス南相馬のスタッフやボランティアの方々が、「命の行進」「ミサと集い」などに参加されたことが紹介されています。石巻ベースでは、この日を、祈りの 1 日とし、前日から自分たちが心を込めて作ったお地蔵さまを並べ、祈りの空間を作りました。当日は朝から次々と来た方が祈りをささげ、喜んで帰られる被災者の方々の姿が胸を打ちました。

3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ

仙台教区サポートセンター

東日本大震災から丸 7 年となった 3 月 11 日、仙台教区カテドラル元寺小路教会では、午後 2 時半から「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ」が行われました。

東日本大震災翌年に次ぎ、2 度目の日曜日にあたる 3 月 11 日。どのくらいの人が集まってくださるだろう、昨年よりも参加者は少ないのでは……と心配しましたが、お天気が崩れることもなく、大聖堂は予想を上回る 300 名近い参加者でいっぱいになりました。

午後 2 時半、聖歌とともに、仙台教区の高木健太郎神学生、半澤孝至さんはじめ元寺小路教会の侍者 7 名が先導し、司祭、司教たちが入堂しました。入祭の聖歌が終わり、パイプオルガンの曲が静かに流れ始めました。「大震災被災者の慰霊のために静かに曲に合わせて祈りをささげることができました」と何人かの方から感謝されました。震災発生時刻の午後 2 時 46 分には鐘が鳴り、黙とうをささげました。主司式は仙台教区の平賀徹夫司教、説教は、現在福島県の前町教会で司牧に当たられている幸田和生東京教区補佐司教、ともにミサをささげられたのは神田裕神父(カトリック司教協議会仙台教区復興支援室担当・大阪教区)、森田直樹神父、ボルデュック・エメ神父、小野寺洋一神父でした。



幸田司教様の説教では、震災後に福島に関わり、一昨年から南相馬市で暮らす中で体験されたこと、感じておられることをお話してくださいました。

震災から 7 年経った今も、心の復興にはまだ時間がかかり、それが大きな課題であること。大きな喪失を体験した人に必要なことは、[empowerment=有力化：その人の中に残っている力を引き出してのばすこと]と[reconnection=再結合：断ち切られた関係を取り戻していくこと]。被災者には、取り残されている人、立ち止まり、行き止まり、孤立してしまう人がいるが、その人の力を引き出し、つながりを作っていくことこそが、「心の復興」であり、どのようにそのつながりをもつようにしていくかが、課題であると話されました。

そして、7 年経った今も原発事故は終わっていない。他の地域の人の中には、原発事故は終わっていると考えている人もいるようだが、福島には、事故を起こした炉及び廃炉となったものを含め、10 基の原子炉(福島第一原発 6 基、福島第二原発 4 基)がある。



原発事故の被害にあった人々は、それを安全だと思えない、そのような炉があるところに帰っていかない、信用していないのが現状で、福島だけが取り残されていくことは、決してあってはならないこと。

人間の命と尊厳を守るため、今すぐ解決することは不可能だが、一歩ずつ歩みをすすめ、少しずつ解決していく、目先のことだけ考えて原発を再稼働することは、人類の責任の放棄である。大きな長い目でみて、どこへ向かっていくのか。例えすぐになくせなくても、20~30 年後にやめていく、やめていくことを基本に考えることが大切。これは、私たちの責任であり、未来の子どものため、よりよい社会・地球を守っていくために必要なこと。

教皇フランシスコが「時間は空間に勝る」とおっしゃっているように、長期的視野に立って原発をやめるという目標に向かって、プロセスを大切に平和を願っていくことが大切である、というメッセージに、皆、真剣に耳を傾けていました。

前年同様、侍者、聖書朗読、答唱詩編の歌唱、共同祈願、奉納など、元寺小路教会やチーム・カリタス仙塩メンバーをはじめとして、信徒の皆様が担ってくださいました。また、午後 2 時から予定されていたスペイン語ミサの代わりに追悼・復興祈願ミサへ参加する形を取っていただきました。関係者の皆様、ありがとうございます。

そして、この日、多くの方々とともに祈ることができたこと、また、同じ時間に全国各地でも祈りをささげてくださった方々がたくさんいてくださったことに、心から感謝申し上げます。



共同祈願の方々



退堂の様子



毎年手話をしてくださる奉仕者の皆さん



元寺小路教会の方による奉納

福島県浜通りでの追悼行事 ～宗教や人種の壁を越えた祈り～

カリタス南相馬ベース長 畠中 千秋

2018 年 3 月 11 日前後には、福島県南相馬市周辺一浜通り一では、様々な追悼行事が行われた。時系列でご報告したいと思う。

「命の行進」

3 月 10 日(土)、日本山妙法寺主催の「命の行進」に、小高区にある曹洞宗同慶寺の皆さんと共にカリタス南相馬も参加。「命の行進」は、宗教宗派や人種の壁を越えた祈りの行進で、参加者の各々が「南無妙法蓮華経」を唱えたり、カトリックの祈り、また、アメリカインディアンの大地の祈りを捧げ、津波の被害を受けた海岸を目指して歩いた。

今年は、小高区蛸沢地区にある、お地蔵さんの前でも祈りを捧げた。津波で家屋は流され、出産して間もない母子が津波の犠牲となり、お地蔵さんが建立されたそうだ。蛸沢地区は防潮堤工事のダンプが往来し、高台には南相馬市の仮設焼却・減容化施設が作られ、現在も、がれきや被災家屋等の解体された廃棄物が焼却されている。住まわっていた方々の故郷はすっかり様変わりしてしまった。

その後、浪江町請戸港まで移動し、線香とお札を海に向かって捧げ、祈った。数キロ先には福島第一原子力発電所の排煙等が見え、風に舞うお札が波にもまれていた。



命の行進



小高区蛸沢地区のお地蔵さん

カトリック原町教会でのミサと集い

3 月 11 日、カトリック原町教会では、10 時から追悼ミサが幸田和生司教の司式で行われた。引き続き、11 時 15 分～12 時、「東日本大震災追悼と復興を祈る集い～オルガン演奏を聴きながら～」が催された。聖堂内は満席で、約 70 名の方々が来られた。

原町出身の青田絹江さんのオルガン演奏と原町在住の方々の合唱団エピファニーの歌声が響いた。縦・横・幅が約 2 m の小さなパイプオルガンだが、大音響で奏でられ、オルガンも大喜びしているようであった。幸田司教様の若い時には、このオルガンは東京の神学院にあったもので、いろいろな経緯を経て原町教会に置かれている。これまでに多くの方々の心にそれぞれの思い出を残したことであろう。

信徒の皆さんはもちろん、ご近所の方々も一緒にこの時間を共に過ごし、ヨハネの黙示録(21・1-5a)の朗読を聞き、共同祈願を捧げた。「見よ、私は万物を新しくする」という、み言葉を心に刻み、これからの新たな年月を歩んでいく勇気と力を願った。



原町在住のエピファニー合唱団の皆さん

東日本大震災慰霊法要(曹洞宗同慶寺)に参加

3 月 11 日午後 2 時から、曹洞宗同慶寺で、東日本大震災慰霊法要にシスターやボランティアの方々が参加した。「般若心経」と「東日本大震災被災者のための祈り II」を宗教の壁を越えて参加者全員で唱和した。田中徳雲住職ご自身のお子さんたちが、7 年ぶりにお寺に戻って来たというお話には感動した。

この現代社会において、一人一人がどんな社会(世界)にしたいのか、そのためには何ができるのかを考えて、できることから実行していくことが大切だと思った。(※小高区は福島第一原子力発電所から 20 km 以内にあり、2 年前に避難指示解除となった。)



「100 万人追悼の線香花火ナイト」

3 月 11 日午後 7 時、全国一斉天下「100 万人追悼の線香花火ナイト」のご案内を地元の方からいただいた。花火には元来、鎮魂の意味合いがある。全国、あなたのいるその場所で。呼びかけは NPO 法人 Ray of Hope「希望の光プロジェクト」。今年もボランティアさんたちと線香花火を灯してお祈りした。



東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式

3 月 14 日、初夏を思わせる程の好天のもと、浪江町請戸の海を見渡す大平山霊園で、世界宗教者平和会議主催の東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式が行われた。

神道、仏教、イスラム教、キリスト教の 9 団体と地元浪江の関係者約 60 名が集い、宗派を超えて 182 名の犠牲者、遺族の方に向けて心を合わせて祈りました。それぞれの祈りの形は異なるものの同じ方向を向いて祈る姿に共感した。

祈りに合わせて 14 時 46 分に黙祷し、一人一人慰霊碑に向けて献花した。式の後、震災、大津波を辛くも生き残った K 氏の話に耳を傾けた。請戸には当時、約 600 軒の家があり、それらがわずか数分ですべて流されたこと、自分の家も流され自分だけが助かり、奥様を亡くされたこと、請戸地区は高放射線量のため 1 か月も遺体捜索が許されなかったことなど、苦衷の体験を分かち合ってくださった。

私たちはこれらの言葉を心に刻み、8 年目の歩み方を模索しなければならなかった。



宗派を超え、同じ方角を向いて祈る参加者たち

3・11 追悼・復興祈願ミサ

札幌カリタス宮古ベース

札幌教区サポートセンター主催「3・11 追悼と復興祈願ミサ」は、これまで、札幌・北一条教会などを会場に行われてきたが、今年は、カトリック宮古教会を会場に行われた。

札幌から 12 人、盛岡からはバスを仕立てて 30 人余、東京、釜石、八戸から来てくださった方、宮古の信徒を含めて 77 人が参加してのごミサは、7 年間で最も多い人数だった。

主司式は、札幌教区上杉神父様。共同司式は、地元のパウロ神父様、ウィリー神父様、そして札幌教区佐久間助祭（3 月 21 日に司祭叙階予定）。

歌声も、祈願の唱和も、大変美しく、心強く聖堂に響いた。

佐久間助祭は、東日本大震災支援開始当初の 3 か月ほど、宮古の状況把握や石巻ベースの担当者として活動され、その後、神学校に行かれた。この日、説教を担当し、次のように語られた。

「支援活動が続いたのは神のみ業。このような災害は何故？と問われて答えることはできないが、どんな時でもキリストは痛みを共にしてくださり、共に歩んでくださっている、続けてきた支援活動=愛の実践を導いておられると確信している。宮古市で活動できたことや出会いは財産。大変な時にこそ神に希望を置くことを学んだ。」

ミサの最中の 14 時 46 分、防災無線の呼び掛けと教会の鐘の音を合図に黙祷を捧げた。一致して祈った、とても良いミサだったが、終わってからは十分な時間をとれず、それぞれが各々の道へ派遣された！



3・11 祈りの 1 日を迎えて

カリタス石巻ベース 佐藤 光典

2018 年 3 月 11 日、東日本大震災から 7 年が経った。穏やかな日差しとともに静かな朝を迎えた。朝起きてなぜかいつもと違う思いから、7 年前の朝の事が思い浮かび思わず目を閉じて祈りたくなった。

石巻地方では 3 市町でそれぞれ主催する追悼式が行われ、犠牲になられた方々のご冥福を祈るとともに復興完遂の誓いを新たにしていた。また慰霊碑の除幕式や追悼ミニコンサート等も行われた。

石巻ベースでは「祈りの一日」とし、この日を共に過ごす場所としてオープンスペースを開放した。



11 時オープンにもかかわらず、30 分前からベースの入口にはたくさんの方が並ばれていたため、15 分繰り上げてオープンした。当日は各地でも、いろいろ行事があったにもかかわらず、たくさんの方が来られた。

その中には、身内の方の法要の前に駆けつけてくださった方も数名おられた。皆さん、お茶やコーヒー、お菓子をいただきながらにぎやかに過ごされていた。

オープンスペースには、1 人のボランティアさんが鎮魂と復興への願いを込めて描いた絵を飾り、その前に置いたテーブルには、数日前に利用者さんと一緒に作ったお地蔵さんを並べ、周りにはろうそく、お花を飾り、祈りのスペースを設置した。並べられたお地蔵さんの一体一体がいろいろな表情をしていて、作られた人の思いが感じられた。

お昼には、朝早くからスタッフ、ボランティアさんが作った、はつと汁(すいとん)を皆さんに振舞ったところ、あまりの美味しさからかおかわりをする方が多く、皆さんからとても喜ばれた。食が進むとともに、話の輪も広がり、とてもにぎやかな時間が過ぎた。



心を込めてお地蔵様をつくる利用者さん



お地蔵様に顔を描く利用者さん



個性豊かなお地蔵様が並びました



1つ1つのお地蔵様を丁寧にご覧になる皆さん

話をしているうちに震災が発生した 14 時 46 分を迎え、サイレンとともに一斉に黙とうを捧げた。この時間、各地でいろいろな思いで黙とうを捧げた方々と、思いを一つにすることが出来た。その後解散の時間となり、帰りには、利用者さんが自分の作ったお地蔵さんを大事そうに抱えて帰られた。

ある方は、このお地蔵さんを亡くなられた旦那さんの仏壇にお供えすると言って帰られた。

本日、参加された方の中には、数週間前に旦那さんを亡くされた方がおられ、ふさぎ込んでいた所をスタッフから「いつでもどうぞ」と言葉かけられ、来るのがこの日で 2 度目、「あ～来る所が出来て救われた」と、とても喜んで帰られた。

震災から 7 年、復興への月日の経過の長さを感じる。その中で、カリタス石巻ベースが関わり続けていることで、地域の方々の心のよりどころになりつつあるのだと思う。

これからも皆さんの心の復興に少しでもお役に立てるよう、自分たちの出来ることを考えていきたいと思っている。

